

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2014年1月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊 26 年目

創刊 1989 年 Nr. 295



Oskar Kokoschka Der Maler II (Maler und Modell II), 1923 Öl auf Leinwand, 85,1 x 130,2 cm Saint Louis art Museum, Nachlass von Morton D. May © Fondation Oskar Kokoschka/VBK, Wien 2013
レオポルト美術館 Leopold Museum KOKOSCHKA Das Ich im Brennpunkt 2014年3月3日まで延長展示



杉本純の原子力の話 II ウイーンと京都 28



経済産業省の総合資源エネルギー調査会基本政策分科会によるエネルギー基本計画案が平成二五年十二月六日に発表された。それによれば、原子力は、安定供給、コスト低減、温暖化対策の観点から、安全性の確保を大前提に引き続き活用していく重要なベース電源と位置付けている。ただし、原子力発電依存度については、省エネ・再エネ導入や火力発電効率化等により可能な限り低減するとしている。この方針の下で、安定供給、コスト低減、温暖

対比では、両市の古典芸能について述べてみたい。ウイーンの古典芸能と言えば、ウイーン古典派として知られるハイドン、モーツアルト、ベートーヴェンなど十八世纪頃にウイーンで活躍した作曲家による音楽が有名である。ハプスブルグ家の庇護の下、彼らが発展させた様式は欧州各地に大きな影響を与えるとともに、作曲した交響曲やオペラなどは、現在も世界中で公演されている。一八六九年に完成したウイーン国立歌劇場のこけら落とし公演では

化対策、技術・人材維持等の観点から必要とされる規模を十分に見極めて、その規模を確保するとしている。また、安全性を全てに優先させ、国民の懸念の解消に全力を挙げる前提の下、原子力規制委員会によつて安全性が確認された原子力発電は稼働を推進するとしている。

同一距離を移動する場合、飛行機の方が自動車より一桁以上安全であることはあまり知られていない。そのため、二〇〇〇年の米国九・二テロでそれまで飛行機で国内移動していた人が車で移動した結果、翌年の一年間だけで約千六百人が車の事故により余計に亡くなつたと評価され電する場合、原子力の方が化石燃料に比べて発電に伴う事故や病気によ

る死「亡」者が桁違いに少ないと云ふことは、工場の事故による死者を「死」者と云ふようにしてゐる。我が國で原子力発電を全て停止して化石燃料で発電すると、一年間に死する人が大気汚染等により余計に死んですると世界保健機関のデータに基づき評価されている。原子力発電を見直した新エネルギー基本計画は、その意味でも我が国の将来にどうして朗報である。

さて、今月のウイーンと京都の狂言が有名である。室町時代に京都を中心として、足利義満など将軍や公家、諸国大名らが舞台を作り、観阿弥・世阿弥親子など能狂言師たちを抱え、能会を開いて楽しんだと言われている。現在では、金剛能樂堂や京都觀世会館などで能狂言の公演が行われている。また、一六〇三年の出雲阿国の発祥による歌舞伎も京都の古典芸能として有名である。四条大橋たもの南座は、我が最古の歴史と伝統を持つ劇場であり、年末の吉例顔見世興行は江戸時代から三百余年の歴史がある。両市の古典芸能は高い品質に支えられ、地元の人たちを始め多くの観光客を惹きつけて止まないことが共通している。

余談であるが、筆者はウイーン狂言友協会でのコンサートや国立歌劇場でのオペラを家内と共にしばしば楽しんだ。京都では能狂言を観る機会はこれまでなかつたが、平成二四年暮の吉例顔見世興行を運良く観ることが出来た。両市の有名な古典芸能を楽しむことができた幸運に感謝しつつ、生誕二五〇年を記念した年に描いたモーツアルトハウスマケツチを掲載させていただく。

* 参考文献 「反原発」の不都合な
眞実(藤沢数希)

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウイーン事務所所長 ■



「原発は重要電源」 新エネルギー計画案 建て替へに道

新エネルギー計画案は自、中長期的なエネルギー政策の方針を定め、資源の有効利用と質づけ、「再生可能エネルギー」の開拓と普及を図ることを目的とするもの。一定規模の資源を、や新規開拓を開く内容で、毎日新聞 12月7日付朝刊より

モーツアルト、ヴァン二、マーラー、ヤラヤンが総監督、小澤征爾が音楽監督を務めたことでも知られている。